

図書案内

2022年 3月号

担当 1-3 尾久 1-4 杉本 1-5 鍋田 1-6 日吉

別れと出会い

3月となり、卒業の時期が近づいてきました。卒業とは別れを象徴するものであると同時に、新しい世界と出会うきっかけでもあります。今年度最後の図書案内では「別れと出会い」というテーマに基づいた本を4冊紹介します。

新年度へ向けて、心温まる本たちと出会ってみてはいかがでしょうか？ 本は図書館で貸出しています。

別れ



『君の臍臓をたべたい』 住野よる

病院で一冊の文庫本を拾った「僕」。そのタイトルは「共病文庫」で、持ち主はクラスメイトの山内桜良だった。そしてそこには臍臓の病気で彼女の余命があとわずかしかないことが書かれていて……。

映画やアニメにもなったこの作品。知っている人も多いのではないのでしょうか。この機会にぜひ手に取ってみてください。読後、きっとこのタイトルに涙します。(鍋田)

人に食べてもらおうとね、魂がその人の中で生き続けるんだって。

出会い



『一冊でわかるインド史 世界と日本がわかる国ぐぐりの歴史』 水島司(本校第23回卒業生)

近年、世界をリードしつつあるインド。その歴史は古代から、他地域との交流なしには成り立ちませんでした。

インドは、多言語、多宗教と多様性のある国です。その背景には、常に多民族や他国との結びつきが深く関わっています。どのような出会いによって今のインドができたのか、という視点で見ると楽しめる一冊です。(尾久)

多様な風土が生まれ、古代から伝わる神秘的な光景が現在も見られると同時に、著しい発展を遂げつつある。

別れ



『眠りの森』 東野圭吾

名門バレエ団で男が殺された。あるバレリーナが「私が殺した。」と言うが証拠が見つからない……。そんな中、次々と起こっていく殺人。事件を通して様々な真実が明らかになっていく。刑事である加賀は、被疑者の友人である美緒に惹かれてゆくが、やがて別れの時がやってくる。

ミステリーと恋愛の要素が合わさった作品で、私のお気に入りの一冊です。(日吉)

何かの目覚めを感じさせるような口づけだった。

出会い



『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』 ブレイディみかこ

この本はイギリスでの差別について書かれた本ですが、「差別はよくない」「許してはいけない」と声高に書かれているわけではありません。私たちの周りでも起きていそうな日常のなかでの「差別」というよりは、「区別」について訴えかけてきます。何気ない「区別」が「差別」につながらないように、この本を読んで目を養ってみてはいかがでしょうか。(杉本)

「どうしてどっかじゃないといけないんですかね?」「は?」
「僕は両方あっていいと思います。」

最愛の人に出会えるのはもはや奇跡?

私たちの人生が80年だと仮定したら、私たちが一生で出会う人の数ってどれくらいだと思いますか? 一説では右記のように言われています。世界人口白書 2016によると、全世界の人口は、約74億3300万人。この数の中から、私たちが誰かと出会うというのは、もはや天文学レベル。ましてや最愛の人を見つけられるか心配になる人もいると思います。しかし、出会いを求めるのに必死になるのではなく、出会いの中で、求める条件や判断基準を明確にすることが大切なのではないのでしょうか。一つ一つの出会いを、自分の理想とする幸せをつかむために大切に生かしていきたいですね。

- ・何らかの接点を持つ人 30,000人
- ・同じ学校、職場、近所の人 3,000人
- ・親しく会話ができる人 300人
- ・友人と呼べる人 30人
- ・親友と呼べる人 3人

【参考】

(株)染谷商会 確率 <https://someya.amebaownd.com/posts/9481547/WEB>
進路のミカタ <https://mikata.shingaku.mynavi.jp/article/60162/>